

甕

破

柴

田

登場人物

柴田修理亮勝家

(四十一歳)

三上太郎盛重

(凡二十五歳)

勝家の臣 青池辰馬

同 竹中寅松

同 池内龜助

同 赤鳥忠太

使者 平井甚助

供の士 卒

侍女 常夏

(凡十八九歳)

供の下 婢

兵卒 甲内

同 乙平

城方の兵 大勢

甕破柴田

小 姓 二 人

所——長光寺城の廓内——同 城内書院——返し——同 奥庭水屋。

時——元龜元年六月四日のこと。

上 長光寺城の廓内

小丘ありて赤松生ひたり、近きあたりには同じき大木あり。兵卒二人立ちて對話。

兵 甲 暑い事ぢやなう、やがて八刻下りと思ふが、この暑氣は何事ぢや、身中也熱つて焦けるも知れぬわ。

兵 乙 せめて風でもあつたなら、少しは凌ぎよいと申す者だが、死人の様に靜かな空合、いとど暑さの増さうといふものぢや。

兵 甲 恨めしい様の霽續きで、さらでも薄い用水の、根を切られたが味方の大難、日々の飲代を定められると、反つて渴きが強くなつて、噓ではおり無い水の中なら、どんなに濁つて居やうとも、第一

番に飛込むつもりぢや。

兵 乙 寄手の奴等も武勇達者の柴田殿には、とても正面に敵對が出来ぬと考へたか、水を塞さふつて堀川の、

鮒や鯰と同じ様に、味方を渴き責に致さうぢやまで、さりとて卑怯な奴原だ。

兵 甲 何と云はうが水が無いのは、兵糧に事を缺いたよりも難澁ぢや。

兵 乙 いかにも膳に酒が無く、人間に女の無いのも同然ぢや。

兵 甲 女と云へば腰元の常夏様が、小女を供に今方ここを通られたのは、何處へお出なされたか。

兵 乙 二の廓内の八幡宮に味方勝利の祈誓と申すが一の用ぢやよ。

兵 甲 お主、面白い事をおいやる、八幡宮が一の用なりや二の用とは何ぢや。

兵 乙 やれ風上には置けぬ奴、常夏御寮が軍神は八幡大菩薩の外にあるわ。

兵 甲 城内には八幡宮の外に氏神は在せられぬわ。

兵 乙 ははは、常世には珍らしい無風流の男ぢや、常夏御寮の軍神は陣中一の風流男三上太郎盛

重殿ぢや。

兵 甲 それにて思ひ當つたわい。三上様も先程から此あたりを彷徨うろたせられてあつたわ。

兵 乙 人の戀路の邪魔をすると、來世は鳥に生まるるさうな、分相應に我等は急いで持場へ行かう。

(兵卒二人下場。三上太郎盛重上手より登場。)

太郎

厳しき暑氣かな、阿鼻焦熱の猛火も物かは、さりながら、その焦熱の猛火より、なほ誇り立つ戀路の炎、身の一大事さへ忘れ果てて、欲界の快樂に耽り、旱魃も、籠城も、魂ここにあらざれば、苦樂の外に打捨てたり、放るるときは逢瀬に憧がれ、逢ふときは夢に過しつ、けふは遽かに消息して我等に逢はんと申越せしが、待てども過ぎ女の足、屠所へ赴く羊なりとも、今少しは早からうに。

（婢女を先きに常夏下手より登場。婢、太郎を見て常夏の袖を牽く。常夏點頭く。婢、左右を見廻し常夏に目禮して下場。）

太郎

（あたりを見ながら）常夏殿。

常夏

盛重様。

太郎

其處は暑うおちやる、木蔭へ參られい、さて對陣の忙しき中に火急用事の出来せしとは何事の起りしにか、とう／＼語られい。

常夏

火急の用事と申せしも貴方のお顔を見たい爲め。

太郎

なに見たい爲め。

常夏

さア貴方のお目にかかる外には、妾に用事はありませぬ。

太郎

常夏殿、常とは時が違ふぞや、大將の下知によつては直ぐにも敵陣に切つて入るべき今日ならに、唯逢ひたいのみが用事なりとは戯れも時にこそよれ。

常夏 すりやお呼び申したをお叱りあるぢやまで。

太郎 いかにも。

常夏 これはまた思の外のお言葉かな、戀路にそんな道理があつてか、戀と戀との其中には、逢瀬より

大事はない、女だてらに大膽な、八幡様を枷に使ひ、漸く御目にかかつたに、無情^{つれた}うおぢやるも程がある。

太郎 無情とのみ申されな、對陣の其中にて憚りも無く語らば、惡事千里の人の口、もとより狭き城の中に、なほ身を狭ばくなさんかと、思ふも汝と我れとの爲め。

常夏 益ない懸念を起したまふも、御心淺き故にこそ、たとへ浮名が立たうとも、または顯はれ罪の下に、命を捨てうと悔はせじ、貴方と共にあるならば、地獄の釜の火の下でも、安樂淨土と思はうもの。

太郎 晴れて汝と添ふまでは、いとど大事の我が命ぢや、さりとて月を越えたる籠城、勢ひ日々に増さる敵勢、とても勝利は覺束無く、唯幾日を支へやうかと、云ふに止まる味方の有様、互の命は迫まつたぞ。

常夏 さては本國からの助勢は。

太郎 得參るまい、名に負ふ淺井朝倉二家の軍勢、殊に叡山の山徒まで力を合せたれば、本國よりの御

發向は覺束無しと思はれたり。いま我等に降りかかる禍を福に反さん術あれど、とても汝に語り難し。只手を束ねて運命の、車の轍にまさぐられう。

常夏 禍を福に反さん術ありとは、いかなる事か、御聞かせなきとは恨めしや。

太郎 さ、とても汝の同心すべき筈無ければ……

常夏 いや貴方の心に叶ふ事なら……、たとへ命を捨てやうとも。

太郎 はて捨つる命を助けうとてなるに、などて、さらば大事を語り申さむ。四邊に心を配りたまへや。

(兩人左右を見廻して元の座に復す。)

常夏 幸い四邊に人も無し、事の仔細をとう語りたまへ。

太郎 御身が預り居る水屋の鍵を我等に暫く借したまへ。斯くのみにては、いかに慧き汝とて悟り得られじ、寄手は既に城内の水道を斷ち切つたれば、落城束の間なるべしと思ふにかへて拔目なき勝家

殿、數多の甕に天水を貯へ置き、士卒に頒ち與ふ、されば敵に取りては水屋の水こそ一の仇、この仇を倒し、是れを引手に敵陣に身を任さば、恩賞は思の儘、さあらば生命を助かる上に、おん身と晴れて添ひ遂げ得べし。

常夏 え、え、え、さては盛重様には六角方に降参せうと仰有るのか。

太郎 降参などと汚らはし、實は我れは佐々木家にさる者ありと知られたる、鯉江相摸守が子供なり、

幼なきより都に育ち、面體見知れるもの無きを幸ひ、主に取りては大敵たる、織田家に奉公なしたるは、一つの功を立てんが爲めなり、忍び入つて甕を碎かば、それぞ即ち柴田殿を打ちしも同じ、斯く打明けたる上からは、よも汝に異存はあるまじ。

常夏 さては貴方は敵方の……。

太郎 問者でおさる。

常夏 はあ。……（泣伏す）

太郎 常夏殿、いかがでおぢやる、鍵を借させらるるか、但しは否か。

常夏 貸さぬと云へば。

太郎 盛重が身の切迫、腹搔割いて失するまで。

常夏 そはまた短慮。

太郎 いや多年の計策も晝餅となれば、生きて阿容々々歸られうぞ。

常夏 さりとて味方を失はれうか、此上は盛重様妾を共に殺してたべ。

太郎 そりやならぬ。

常夏 とは、またなげに。

太郎 盛重に隨はぬ女、共に死なうとは無禮なり、鍵を貸したまはずば、末代までも仇と仇、なにとて

共に死すべきか。

常夏

すりや死なうにも死なれぬか。

太郎

鍵を貸さうか。

常夏

それは。

太郎

縁を切らうか。

常夏

それは。

太郎

いや我れながら誤まつたり、我に佐々木が主なれば、御身に柴田も主にてある、我れを立てて人を立てぬは、情を知らぬ所業、さらば常夏殿、これまでは幻の夢にてあるぞよ。

(盛重立つて下手に行く。)

常夏

なう待ちたまへ。

(盛重の手を取りて縄りつゝ)

常夏

女は出でて夫に従ふ。云交はせし上からは、いかにも貴方に従ひまする、宵月落つる亥の刻過ぎ、奥庭に忍びたまはば。

太郎

その時鍵を渡されうとか。

常夏

あい。

——幕、若しくは廻す——

中 城 内 書 院

座敷には柴田修理亮勝家、熊皮の上に坐して中央に踞坐す。二人の小姓は左右に侍し、家臣四名は前面に居並びて評議の體なり。

柴田 辰馬、天氣の變はる模様もないか。

辰馬 はつ（椽先に出てて空を見遣り）されば空には白雲のふわりふわりと漂ふばかり、夕立などの起る氣合も見え申さぬ。

柴田 生溫こい佐々木承禎が陣立、四千餘人を引連れて、四百に足らぬ小勢を恐れ、有無の合戦を兎角に嫌ひ、長卷の氣長軍、たとへば籠城月を越さうと、敢て憚る敵にはあらねど、元が領主の事なれば、百姓原も敵となり、終に寛を切り放され、飲水に事を欲かせられては、數萬の敵を取拉ぐ、味方の武勇も用ふるに所なし、あはれ一村雨も來よかし、飽くまで人馬に水を與へ、一舉に敵を敗らうするに。

寅松

仰の如く、土民の内通にて、水道は立切られ候へども、御用意の大甕に、飽くまで水を湛たへたれば、足らぬながらも籠城は續き申す。

亀助

只氣遣はしう候は、大甕の水の盡きざる中に、館殿の御加勢到着の有無、一合を五勺に減じて、持堪へが肝要なりと存じ候。

忠太

此分にては日に増し味方の勇氣は細り、目醒ましい軍はなり申さず、さらでも暑い土用の最中、飲水に事を缺きては、潦の鮒も同様、飛出さんは思ひも寄らず。

柴田

いや館を頼む存念なし、柴田が加勢には半時ばかりの雨が欲しいわ。
(士卒一人登場。)

士卒

申上まする。

忠太

何事なるぞ。

士卒

只今敵陣より御見舞として使者を差越し候。

柴田

なに、見舞に使者が來た、是れへ通せ。

士卒

はッ。

(士卒下場。柴田は辰馬に呟くことあり。辰馬立つて襖に入る。)

柴田座を改む。使者平井甚助士卒に酒肴を携へさせて登場。(寅松庭前に下り)

寅松 御使者、これへ御通り下されませい。

平井 さらば御免下され。

(使者座敷に上り、着座して一禮なし)

平井

拙者事は佐々木承禎が家臣平井甚助と申する者でおりやる。主人承禎申し候は、此度不思議の會、長々の御籠城嘸御氣鬱でござらう、無禮ながら御見舞として、湖水にて漁り候ふ源五郎鮒、到來の伊丹の銘酒一升、進上申候との事でおりやる。

柴田

追がに京近い近江の國主が御心、田舎者の柴田などが思ひも寄らぬ風流の馳走、酒は伊丹の銘物、肴は湖水の源五郎鮒とや、御承知の有様なれば、分けて生肴は珍重致す、早速ながら賞翫仕つらう。誰そある、盃もて。

辰馬

はア。

(奥より辰馬昆布、盃を持參し來る。勝手取つて小姓に酌させ飲まんとす。)

太郎

暫く。

(聲掛けて三上太郎下手より登場。)

柴田

太郎何事ぢや。

太郎

敵方より送り越したるそれなる酒肴を、毒味も遊ばされずに參るとは、餘りなるおん怪り。

破 柴田

柴田 はははゝゝゝ、晴の軍に鳩毒を用ひて敵を害める者やあらむ。

平井 お疑は一應の道理、さあらば拙者鬼役をお勤め申さう。

(平井盃を取らんとす。)

柴田 いやゝ多からぬ酒肴、御不自由なき御使者が接伴、有難過ぎて迷惑致す。

太郎 さらば、毒味も無くて召されまするか。

柴田 (酒を飲んで) 甘露々々、城内にも味の能からぬ地酒の候、御使者に一獻差し上い。

平井 いやゝ拙者は下戸に候へば御無用々々、持參爲したる酒肴を、直に御風味下されしは、拙者の面目此上はおさらぬ、付いては一つ御無心がござる、何卒手水を給はりたい。

辰馬 なに御手水とか、それ。

(小姓二人立ちて飯臺に水を入れたるを運び来る。)

平井 然らば御免下され、いや本日の暑氣はまた格別でござつた、是れはゝ手水にしては格外の水、かくまで多くの……さらば無禮仕る。

(面を洗ひ嗽ぎ等して、元の座に復す。小姓二人立ちて椀より下へ水を捨てて、飯臺を運び去る。平井見て驚く。)

平井 暑中には冷水が何よりの馳走、多分に給はり忝けない。(前面の方を見て) やや、あれなる木蔭に多くの馬を引出されたは。

柴田 御配慮無用、夕暮なれば馬共に洗足をさせ申すのぢや。

平井 なに、あの馬に洗足、この旱魃に清水を、あれ、さりとは無益しい、多くの水を、いやなに柴田殿、拙者は是れにて御暇申す。

柴田 佐々木殿の御芳志宜しく御禮を。

平井 申し傳へ候ふべし。

(平井甚助不審なる面色にて下場。太郎は手水を捨てたる邊を見て)

太郎 數十人が一日分の枿數ぢやに。

柴田 水の様子を伺はうとて、見い、酒と肴を遣し居つたわ。

寅松 さりながら、あの廣庭に馬を引出し、あれ未だ清水にて洗足を致させるは。

龜助 厩の小者が暑氣に中り、物に狂ふて爲すわざか。

忠太 微笑みながら其儘に、見やりたまひて捨置かるるは。

寅松 いかなる事で。

三人 おりやりまするな。

柴田 それぞ計略、水と見ゆるは白米ぢや。

一同 え。

柴田

今がた來りし小才の使者、手水を乞ひてそれとなく様子を伺ふ、さるに依つてたぶくと水を汲ませ、其上遠き廣庭にて、清水と見せて白米を、馬足に濺がせしは敵に油斷をさせう爲ぢや。

辰馬

君の計策圖に中り、馬足に注げる白米を、見たるときの愕きかた。

寅松

飛礫を受けたる鳥の如く、立居を忘れ、度を失ひ、

龜助

言句も出でず眼を睜り、世に不思議なる面色にて、

忠太

直ちにお暇仕り、慌だしう歸つてござる。

太郎

かくとも知らず敵方にては、手薄と思ひし用水も、有り餘るぞと心得て軍評議も狂ひ申さん。

(勝家は大笑をなして立上り)

柴田

はて、心地えい事であつたよ。

幕、返し

下奥庭 水屋

物古りたる杉木立の下に、板戸にて圍ひたる水屋あり、厳しく錠を下したり。

木立の間より常夏被衣を藏りて登場。

常夏

月も落ちたる合圖の刻限、あの太郎様は何してぞ、思へば不思議の今夜の仕儀、戀は惡趣の近道ぞ、御主も忘れ、味方も忘れ、天も地も敵として、間者の夫に付かうか、天道様もあんまりな、少女の胸に戀草の芽生をさせて、敵の味方の軍のと、雪霜霰を並べたて、散々に艱ませて、孱弱い女を苛なむのか、ああどうぞして太郎様が間者でなく、御館様が佐々木の仇でなかつたら、こんな辛苦はあるまいもの、儘にならぬが煩惱の、浮世は輪廻の闇なれや。

(人の來る氣色に、常夏木蔭に身を隠す。太郎下手より登場。)

太郎

(小聲にて) 常夏々々。

常夏

あい。

(常夏木蔭より出づ。)

太郎

鍵は。

常夏

なに鍵とや、さりととは御心、人目を窃み忍び出でた常夏よりも、この鍵がさほどに愛しうおぢやるのか、えゝ腹立ちや、とても見替られた此鍵を、渡すも反りて腹が苛られる、さうぢや、一層のこと捨てゝ退けう。

(鍵を地に擲つ。)

太郎

やや、大切の鍵を。

常夏

又しても鍵とや、聞こえた、鍵の外には大切の者は無いのぢやな。

(常夏太郎の方へ摩り寄る、太郎手を取りて)

太郎

いかに女と云ひながら、あまりの謔語、たはごと常夏聞かれない、つねの逢瀬とは違ふぞや、御身の幸は我の幸、水屋の扉も二人の運も、開くべき鍵なるに、時移らば如何にせん。

常夏

ほんに一時の腹立に、鍵を捨てたは私の誤り、確かに此邊と思ひました。

太郎

此あたりにて音せしやうぞ。

太郎

あたりに心を付けい。

(水屋の鍵を開きて中に入る。常夏木蔭に忍ばんとす。電燈を携へたる忍びの武士登場。)

武士

曲者。

(武士常夏を捕へんとす。常夏拂つて、電燈を落とす。武士は「曲者々々」と連呼す。水屋より太郎出でて武士を斬る。其中に二三人の武士馳せ來りて暗闘。常夏は木蔭に忍び居る。終に松明を携へたる武士數人出で来る。

太郎奮闘す。柴田勝家小具足長刀を持ちて登場。)

柴田

謀叛人め、推參なるぞ。

(太郎は左右の武士を防ぎつゝ、水屋の戸を後にして)

太郎 やあ謀叛人にあらず、生れ付いての六角方ぞ。

柴田 なに六角方とは。

太郎 さる者ありと知られたる鯨江相模守が一子同苗太郎盛重、かくと名乗り申す上は、尋常に勝負あれ。

柴田 小賢しい小わつばめ、さりながら、我が面前にて名乗を揚げし勇氣に免じ、身が相手を致してくるわ。

(柴田進み出で二三合にして直に高股を薙ぐ。太郎倒る、木蔭より常夏出で)

常夏 やや、太郎様が。

(と太郎に近づく。勝家は目も觸れず、士卒の松明を取りて水屋に入る。士卒は呆れて暫時啞然たり。勝家水屋より出でて士卒に向ひ)

柴田 申すべきことあるぞ、組々の頭人共に、急ぎて是れへ参るやう洩れなく申せ。

(松明を携へたる武士等左右に馳せ行く。太郎刀を杖に起き上り)

太郎 此上は、はや／＼命を取りたまへ。

柴田 ほ、健氣なる奴、鯨江相模守が一子とは始めて聞きつる敵の間者、いかにも命は止どめてくれん、

さりながら水屋へは何故あつて忍び入りしぞ。

太郎 甕を破つて捨てうため、さあらば味方の勝利ならんと、思ひ込んだる我が企も、運拙くして斯くの仕儀。

柴田 やあ女、大切の鍵を何にとて人に與へしぞ。

常夏 (太郎の小刀を取りて喉を突き) 二世を交せし夫の頼み、命を懸けて渡しました。

(士卒大勢左右より登場、追々に居並ぶ。柴田は持ち來れる床几に腰を掛け)

柴田 水屋の戸を取りはなせ。

(士卒四人程にて水屋の戸を撤去す。勝家立つて士卒に向ひ)

柴田 いかにか方々承はれい。

一同 はア。

柴田 そもそも此度の合戦、敵は數千の大勢なるに、味方は漸く二百騎に足らぬ小勢ながら、久しき籠城に持ち堪へたるは方々の働き、勝家に取りて嬉しく思ふぞ、また館の御感斜ならずと存するぞ、然るに敵は土民を語らひ、用水の笕を切り放したれば、味方いかに猛しとて、乾ける喉を濕ほし難く、終には陸地の魚同然、忽ち命を落とすべし、見られよ數の甕の中、只一つを除きては、水の入りたるものも無し、明日を限りの名残の甘露、いま酌みかはして今生の思ひ出となさんはいかに。

辰馬 仰せ畏まつて候。

柴田 さらば吸筒に一杯宛を計り、組下の物共にも分たれい。

(士卒各々水を酌む。勝家も士卒が薦むる吸筒に喉を濕ほし)

柴田 今こそは一滴たりとも残れる水なし。

(柴田立ち上り、持ちたる長刀の石突にて甕を壊る、一同愕然。)

柴田 甕は土に歸つたは、天に迫まれ深き死に、乾鯨の如く、へたばり失するか、但しは敵中に切入つて、甘露の血汐に濕ふべきか、一日生きて憶病者となるべきか、一刻早く命を捨てて勇者となるか、人間の花盛、其儘に萎^しらかすは無念さうぞ、誘ふ山嵐に連れて散らさんはいかに。

辰馬 仰せの如く所詮死すべくば敵の刃にかかりたし。

寅松 渚に残りし小魚の如く、乾枯び死なんは残念千萬。

龜助 冥途の道連れ一人たりとも、多き程が面白し。

忠太 切つて切つて切入つて、敵の血汐に湯浴を仕らう。

柴田 勇まし／＼、急ぎて用意致せ。

一同 はゝア。

(一同下場。勝家も行かんとするを)

太郎 いかに勝家殿、遽かに御出陣とや。

柴田 思ひ付いたる早速の掛引、甕を破つて味方を激まし、危ふき合戦の首途なるわ。

太郎 必死を極めし城方に不意打されては、味方の敗北まのあたり、其の源は太郎が振舞、反りて主を害ひたるか。

常夏 三世の御主の目を盗み、掠め事せし天罰か。

太郎 敵と味方の戀の果。

常夏 主を捨てたる戀の末。

太郎 いざや常夏。

常夏 盛重様。

(二人相刺して斃る。柴田悵然として)

柴田 運命の期する處、吉凶を天に任せし今夜の軍、勝利はまだ定かならねど、望める戀に身を終りし、悶えに悶えし二人の者は、安らげく勝利を遂けしぞ、あはれにも心ゆくかな、美はしき者は世を終つて彼岸に去りぬ、なにとて我れは長刀に深き戀をば懸けたりしぞ。

大正十四年二月一日印刷
 大正十五年八月一日再版
 大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集
 第三卷



著者
 發行者
 印刷者
 印刷所

(非賣品)

松居翁
 高安月
 山崎紫
 伊原青
 岡鬼太
 郎園紅

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎
 東京市下谷區二長町一番地
 守岡功

東京市下谷區二長町一番地
 凸版印刷株式會社

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座二一八八番
 振替東京五二二九八番